
マンホール

零物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マンホール

【Nコード】

N4351F

【作者名】

零物質

【あらすじ】

孫は毎日じいちゃんの帰りを待っていた。ある日、孫は「弟はいるの?」と問う。それに答えたじいちゃんの答えとは?そして、その後起きた意外な結末とは……?

僕のおじいちゃんはいつも車の工場で働いています。
いつもよく遅くまで働いています。
僕が寝る30分前に帰ってきます。

ある日のことです。

ガチャツ

じいちゃん 「ただいま」

孫 「あ、じいちゃん！おかえり！」

じいちゃん 「ああ、孫。」

孫 「今日はどんなお仕事したの？」

じいちゃん 「今日は部品運びの仕事をしたんだよ。それがそれが
大変でね、毎日腰が痛くなるほど働いてるんだよ」

孫 「ふーん、仕事ってそんなに大変なんだ。」

じいちゃん 「仕事をバカにしちゃあいけないよ。この職業がなくな
ったらどうなると思う？」

じいちゃんは孫に問いかけた。

孫 「うーんと、うーんと……。わかんない。」

じいちゃん 「答えは、「車が売られなくなっちゃう」でした。車
が売ってなかったらみんなが買えなくなってみんな困るんだよ。」

孫 「そんなに大切な仕事なんだ。へえ。」

じいちゃん 「ああそうだよ。」

その時、孫はふと思った。

孫（じいちゃんって弟居るのかな？）

じいちゃん「孫、どうしたのかな？」

孫「じいちゃん。」

じいちゃん「なあに？」

孫「じいちゃんって弟はいるの？」

じいちゃん（・・・！？）

じいちゃんはなぜか動揺した。

孫「・・・じいちゃん？」

じいちゃん「その話は・・・、着替えてから和室で話そう。」

孫「う・・・うん。」

じいちゃんは突然何かに急ぐかのように走り出した。

孫「じいちゃんどうしたのかなあ？」

そう疑問を抱く孫であった。

孫はじいちゃんの部屋をこっそり見た。

が、誰もいない。じいちゃんはいつたどこに行ったのだろう。

そのころじいちゃんは2階のばあちゃんの部屋で座っていた。

じいちゃん「孫にどう説明しよう・・・。」

ガチャッ

じいちゃん「ん！？」

孫「じいちゃんこんなところにいたのかあ。探したよ。」

じいちゃん「心配掛けてごめんよ。さあ、和室へ行こう。」

じいちゃんはわざとなのか、いつもより遅く歩いた。

孫 「じいちゃん、はやく行つてよ。
じいちゃん 「う．．．うん。」

それでもじいちゃんは速度を変えなかった。

孫 「んもお！どいて！」
ドンッ

じいちゃん 「あっ！」

そんなこんなでいろいろあつてようやく和室へ．．．。

サアアッ

孫 「じいちゃん遅いよ。」

じいちゃん 「悪いなあ、孫。」

じいちゃんはノソノソ入ってきた。

孫 「んじゃあ、話をするけど。」

じいちゃん 「．．．。」

孫 「じいちゃんに弟っているの．．．？」

じいちゃん 「．．．。説明する。」

じいちゃん 「あれは13年前のこと．．．。」

わしの弟は20歳年下で、中学高校ともに3位以内をキープする優等生の中の優等生だった。

そして大学受験を迎え、見事に合格した。なんと2位で合格したのだ。わしは思わず腰が抜けそうになった。

ある日、わしの弟はアルバイトが終わっていつもの道を歩いていた。

その歩くルートに中途半端にふたが開いたマンホールがあった。四角いマンホールだ。

弟はかまわず歩き続けた。

そして四角いマンホールを踏んだ瞬間、シーソーのようにストンと沈み、マンホールへ落ちてしまった。

弟は狭い下水道へ吸い込まれていった。

弟は直径わずか1mでぎゅうぎゅうに詰められていた。

弟は助けを呼ぶが、だれも来ない。

弟はのどから血が出るほど叫び続けたが、やはり誰もこない。

弟は疲れたかのように眠っていった。

そして翌日、目を覚ましたら全身が泥だらけ。

目を覚まして辺りを見回した瞬間、大量の水がドバアツと襲ってきた。

弟は身動きができず、泥水の中に埋まってしまった。

そして下水道の曲がり角で首を強打し、ついに意識不明になり、二度と意識が戻ることはなかった……。

遺体が見つからず、一年半の月日が流れたある日、わしの家からわずか120m先の川で10〜30歳くらいのミイラ遺体が発見された。

わしが現場に行った時に、右足に見覚えのある深い傷があるので「わしの弟ではないか」と思い、DNA鑑定でやってもらった結果、わしの弟であることがわかった。

あのマンホールさえなければ死なずに済んだはず……。あの日以来、マンホールから目を避けるようになった。

孫 「……。死んでたんだ……。」
じいちゃん 「……。ああ。」

孫 「大変だったんだね。誰がマンホールを開けてたんだろう?」
ピカッゴロゴロドカーン!

ザアアアアアッ!

孫 「今日は大雨って言うてたっけ?」

じいちゃん 「・・・。タバコ吸いに行ってくる。」

孫 「え・・・?ちよつとじい・・・」

ガチャッ

バタンッ

孫 「今日のじいちゃんはなんか変だなあ。」

10分後・・・

孫 「まだ戻ってこないよ。どうしたんだ?」

ガチャッ

孫 「おゝい、じいちゃん!どこにいるんだあい!」
ガンガンガン

孫 「ん?マンホール?」

孫は恐る恐るのぞいてみた。そしたらなんと・・・

じいちゃん 「た・・・助けてくれ!」

孫 「じいちゃん!今助けるからね!」

しかし、孫には降りる勇気がなかった。

孫 「うわあん!降りる勇気ないよお!」

じいちゃん 「父さんに言いなさい・・・!」

孫 「う、うん!わかった!」

じいちゃん 「孫、わしのために・・・」

ズゴオオオッ!

じいちゃん 「ん！？水・・・！？わ！？うああうあゴバゴバ・・・」

じいちゃん 「ガバガバガバガバ」

孫 「じいちゃん！助けに来たよ！」

孫 「・・・！？じいちゃんがない！じーちゃあーん！じーちゃあーん！」

父 「やめるんだ！危険だぞ！降りたらお前まで巻き込まれるぞ！」
孫 「じーちゃあーん！じーちゃあーん！」

父は止めようとするが、一向に収まりそうにない。

父 「ほら、救助隊が来たぞ！もう安心だ！」

孫 「できないよおお！うわあああああん！」

そして救助が始まった。しかし、10分すぎても30分すぎても見つからない。

孫 「じいちゃん・・・。どうして・・・。」

父 「もう寝なよ。もう寝る時間を過ぎてるじゃないか。」

孫 「いやっ・・・！」

父 「・・・。」

そして1時間が過ぎた。

孫は疲れのせいか、座り込んだままスウスウ寝ていた。

ついに救助隊は中止を余儀なくされ、明日再開されることになった。

翌日の午前6時27分、じいちゃんは見つかった。
そして7時56分・・・。

父 「・・・おい・・・おい！」

孫 「んん・・・はっ！？じいちゃんは！？」

父 「・・・。見つかったのは見つかったが・・・。」

孫 「・・・どうなのよ、なんなんだよ！」

父 「・・・溺死だ。」

孫 「溺死ってなんだよお・・・。なにそれ・・・？教えてよ父ちゃん！父ちゃん・・・。」

父 「・・・。」

孫 「まさかじいちゃん死んじゃったの？ねえ、死んじゃったの？」

父 「・・・。」

孫 「うわあああああん！じいちゃんあああん！」

そして通夜を迎え、死んだことをホントに知った。

そして葬式・・・。

孫 「じいちゃん。どうして死んじゃったの？ねえ。返事してよ、

じいちゃん。信じたくないよ！じいちゃん、じいちゃん！死んじゃ

やあよおおおおお！じいちゃんあああん！」

父 「・・・、親父・・・。」

じいちゃんは逝った。あまりにも突然すぎる死だった。

まだ幼かった孫には受け止め難い事実だった。幼い孫には辛すぎた現実だった。

あれから12年経った2020年、あの孫が立派に成人した。
就職先も決まり、車の免許も取った。

そして30歳を過ぎたある日、ラジオを聞いていた。

「さあ始まりましたMusicスタジアム21！今回は2002～2004年にヒットした卒業式のテーマソングを放送したいと思います。」

孫 「2002～2004？」

「第一曲目は、ゆずの「また会える日まで」です！では、どうぞ！」
孫 「また会える日まで？」

「青い空 白い雲 勇気を持って踏み出そう 思い出すと笑いあえる 楽しい思い出 大好きなみんなの笑顔が 宝物 強いきずなを 僕は忘れないよ

また会える日まで 夢を忘れずに 変わらないままで ずっといようよ また会える日まで 夢をかなえよう 信じることが 心を つなぐ」

孫 「・・・、グスン・・・ああ、じいちゃん、いまどうしてるのかな・・・？」

孫 「また会えるよね・・・、じいちゃん・・・。僕もいつか逝くよ・・・。じいちゃんのところへ・・・。あの頃のように、手をつないで、遊べるよね、じいちゃん・・・。」

8年後、遺言を残し、服毒自殺した。享年38歳。

遺言にはこう記されていた。

「じいちゃんへ会いに逝くよ・・・。子供の時のように野原を駆け回って遊べると思うから・・・！」

マンホール 完

（後書き）

この物語は2006年に僕の学校で公開した小説です。学校では意外に評判でした。はい。

2008年2月にブログで1日のみ公開しましたが、その時も好評でした。（少しだけですが）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4351f/>

マンホール

2010年10月28日04時18分発行